

地中に埋もれた古墳群

先月の歴史系譜において、真名板薬師堂裏手にある真名板高山古墳の推定墳長は約127メートルと紹介しましたが、現地では墳長を測ると104メートルしかありません。実はこの古墳は、下部が約3メートルも地中に埋もれていて、見た目より実際は一回り大きな古墳なのです。

以前紹介したように、行田市が位置する加須低地は、土地が徐々に地盤沈下し、そこに利根川などが運んできた土砂が堆積したと考えられています。地盤沈下で台地が埋没し、台地上に築かれた古墳も約3メートル埋没してしまったのです。

大型古墳は3メートル埋没しても地上にその姿をとどめていますが、小さな古墳は地中にほとんど埋もれてしまい、地上から姿を消しています。市内では、これまでに大小約150基の古墳が確認されていますが、酒巻、犬塚、斎条、須加など市域北部を中心に地中に埋もれてしまった古墳が数多く確認されています。



酒巻21号墳発掘調査風景(平成4年撮影)

左の写真は、酒巻地内の農道改良工事の際に発見された「酒巻21号墳」の発掘調査状況です。手前の埴輪が並んでいる地面が、約1千500年前の古墳時代の地表面で、その後ろに墳丘があり、石室が残っていました。この古墳は、現在の水田面から約1.4メートル埋もれていました。築かれてからあまり時間を置かず洪水などで一気に埋もれたように、写真のように埴輪が立てられた位置で、とても良い状態で残っていました。利根川側に面した墳丘の反対側は、埴輪の残りが良くなかったことから、反対側から洪水が押し寄せたものと考えられます。

このように、埋没古墳はタイムカプセルのように築造当初の姿を良く留めており、埴輪の配列など、通常の発掘調査では得にくい情報が多く得られます。県内でこうした埋没古墳が見られるのは、行田市周辺の加須低地だけです。もしかしたら、あなたの家の近くにも古墳が埋もれて残っているかもしれません。

(文化財保護課 中島洋一)

このコーナーでは、行田の歴史や名所、名物などを行田ゼリーフライキャラクターのこぜにちゃんが分かりやすく紹介します。



こぜにちゃんが行く!

忠次郎蔵

忠次郎蔵は、足袋の原料を商っていた小川忠次郎商店の店舗および主屋として使われていたもので、昭和4年(1929)ごろに完成した、行田の足袋産業の全盛期を象徴する建物なんだ。また、国の登録有形文化財に登録されていて、とっても価値あるものなんだ。

現在は、おいしいそばを販売している他、NPO法人の事務所や催事施設として使われているよ。ぜひ、足を運んで行田の近代を代表する歴史的文化遺産「蔵」の魅力を感じてほしいね。

今月の表紙

5月17日・18日、NPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワーク主催の「第10回蔵めぐりまちあるき」が開催されました。

市内中心部にある16棟の蔵を巡るスタンプラリーや足袋づくりの実演などが行われた他、人力車やボンネットバスも登場。参加者誰もが「蔵」のある行田の町並みを満喫していました。

■市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)まで。

■市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。

■市報をCD-Rに録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当(内線318)までご連絡ください。



環境にやさしい 植物油インキ

市報ぎょうだは 再生紙を 使用しています